

母語話者の話題開始部冒頭に現れる 言語形式

— 学習者との比較から

若松史恵

◆要旨

話 題転換に関する研究では、話題の開始部に用いられる表現や、談話展開に着目した分析が行われているが、両者をつなぐ研究は少ない。そのため本稿では母語話者と学習者の話題開始部の冒頭に現れやすい言語形式を統計的手法で明らかにし、さらにその言語形式がどのような談話展開に繋がっているのかを質的に分析した。分析の結果、(1) 開始部冒頭に現れやすい言語形式は、母語話者は「え／えっ」「でも」「なんか」「え(っ)と」の4形式であるが、学習者は「え／えっ」「じゃ(あ)」の2形式であること、(2) 母語話者は「でも」「なんか」を、先行文脈との関連を示しながら後続話題を導入する際の標識として用いていることが明らかになった。

◆キーワード

話題開始、開始部冒頭の言語形式、談話展開、母語話者、学習者

◆ABSTRACT

The purpose of this paper is to reveal, through statistical methods, the linguistic forms that tend to appear at the beginning of native Japanese speakers and learners' topic initiation. Furthermore, a qualitative analysis is conducted to understand how the linguistic form is connected to the development of the discourse. The results of the analysis revealed that (1) native Japanese speakers use four topic-initiating linguistic forms "e," "demo," "nanka," and "eto," while learners use two forms "e" and "ja(a)" and (2) native speakers use "demo" and "nanka" as signs for introducing a new topic while showing its relationship to the preceding topic.

◆KEY WORDS

topic, topic-initiating linguistic form, discourse development, native Japanese speaker, Japanese language learner

Topic-initiating Linguistic Forms
Used by Native Speakers
A Comparison with Japanese Learners
FUMIE WAKAMATSU

1 はじめに

初対面会話は相手に関する情報量がゼロの状態から始まり、情報交換を行いながら、お互いに相手との共有知識を積み上げていく。そのような場面で参加者は相互にやりとりを行いながら、臨機応変に話題を導入、展開している。これまでの話題転換に関する研究では、話題の開始に用いられる表現に注目した分析や(村上・熊取谷 1995, 小暮 2002 等)、談話の展開に着目して、後続話題としてどのような話題が選択されるかを類型化する分析が行われている(村上・熊取谷 1995, 花村 2015 等)。しかし、具体的にどのような表現が話題の開始に用いられやすいのか、そしてそれらの表現がどのような談話展開に繋がっているのかという、両者をつなぐ研究は少なく、母語話者の話題開始の特徴が十分に明らかになっていない。どのように話題を変えるかということと、どのような話題を後続話題として選ぶかということは密接にかかわっているため、ともに検討する必要があると考えられる。よって本稿では、初対面会話における母語話者の話題開始に用いられやすい言語形式、およびその言語形式がどのような談話展開に繋がっているのかを明らかにする。

2 先行研究と本稿の立場

2.1 話題の開始に用いられる表現

村上・熊取谷(1995)は、話題の開始に用いられる表現を後続トピックの開始部に見られる結束性表示行動とし、言語表示として、認識の変化を示すことば(「あ」「思い出した」等)、相手に働きかけることば(「ねえ」「あの」等)、談話標識やメタ表現による談話展開の示唆(「で」「でも」等)、後続トピックのフレーム提示(「月曜日ね」「国際ホテルの」等)、トピックそのものの提示(「教師って」)に分類した。また、小暮(2002)は、村上・熊取谷(1995)の枠組みに基づき、話題転換表現の量的な分析を行った。その結果、母語話者、学習者ともに、何らかの話題転換表現を使用する傾向が見られるが、特に母語話者は話題転換表現の使用率が

高く、その中でも談話標識や接続詞の使用が多いことを明らかにしている。

しかしこれまでの研究は、話題の開始に用いられる表現の出現数や出現率が話題の開始部分だけに着目して分析しており、話題の開始部分以外を含めた会話全体での出現数を考慮する視点がみられない。たとえ、ある表現が話題の開始に多く用いられていたとしても、会話全体でも多く用いられているならば、その表現が話題の開始部分に際立って多く用いられているとは言えないだろう。よって話題の開始に用いられる表現の特徴を明らかにするためには、その表現の話題の開始部分での出現数を、話題の開始部分以外を含めた会話全体での全出現数との関係から検討する必要がある。

2.2 話題の開始に用いられる表現と談話の展開

花村(2015)は話題転換の型を新出型、再開型、前提提示型に分け、接続表現、言いよどみ、終了表現、沈黙という話題転換表現の出現傾向を分析した。その結果、話し手は、接続表現や言いよどみ、沈黙という話題転換表現を話題転換の型により使い分けており、また、終了表現には使い分けがみられないことを明らかにしている。花村の指摘は興味深い、例えば、接続表現にも様々な形式があり、「でも」や「だから」などの異なる言語形式が談話展開上同様の働きを示すとは考えにくい。そのため、具体的にどのような言語形式がどのような談話展開に繋がっているのかを明らかにする必要があるだろう。また、このような談話の展開に関わる言語形式は発話の冒頭部分に用いられることが多いと考えられる。発話の冒頭は、先行文脈との関連を示すことができる位置であり、また、これから産出される発話がどのようなものになっていくかを予告できる位置でもある(伊藤 2018)。新しい話題が導入される際、発話の冒頭部分に用いられる表現により話し手が談話の展開を示しているならば、その表現は、聞き手にとっては談話の展開を予測するための手がかりとなる。新しい話題が導入される発話の冒頭部分に用いられる表現と談話展開の繋がりを明らかにすることにより、母語話者の話題開始の特徴が明らかになると考えられる。

2.3 本稿の立場

以上のように、話題の開始に用いられる表現については様々なアプローチか

ら研究が行われている。しかし、今までの研究では、母語話者の話題の開始部分における言語的特徴、およびその言語的特徴と談話の展開との繋がりが十分に明らかになっているとは言えない。

そこで本稿では、母語話者の話題開始部分の冒頭に現れやすい言語形式、およびその言語形式がどのような談話展開に繋がっているのかを、日本語学習者との比較を通して明らかにする。話題開始部分の冒頭に現れやすい言語形式については、話題の開始部分以外を含めた会話全体の出現数と話題の開始部分の出現数を用いて計量的手法で分析する。そして、話題開始部分の冒頭に現れやすい言語形式と後続の談話の繋がりを質的に検討する。

3 分析方法

3.1 話題の認定：話題境界調査

人は流れるように続く会話の中にも、直感的にあるまとまり（話題）を見つけることができる。中井（2003）は、話題を区分するため、5人の被調査者に対し話題区分調査を行い、3人以上の指摘が一致したものを全て話題区分に含めている。直感的に話題が変わったと人が感じるところには、その直感に働きかけた談話の展開を示す何らかの要因があるのではないだろうか。そこで本稿ではこのような人の直感を取り入れて話題を認定する。話題の認定方法は以下の通りである。

会話における「内容のまとまり」の境界である話題境界を抽出することを目的として、9人の調査協力者による12の会話資料の「話題境界調査」を行った。調査協力者は20代～30代、男性3人、女性6人の一般の日本語母語話者である。本稿において、「話題」とは、会話の中で「ある一定の内容のまとまり」をもつ部分とする。調査は、会話資料の音声を「内容のまとまり」を意識しながら1度聞き、その後文字化資料を見ながら再度音声を聞き、話題の切れ目と思わ

表1 会話IDと話者の組み合わせ

母語場面		接触場面	
ID	話者	ID	話者
1	NS1 NS2	7	CJL1 NS2
2	NS3 NS4	8	CJL4 NS4
3	NS2 NS3	9	CJL1 NS1
4	NS5 NS7	10	CJL2 NS3
5	NS1 NS3	11	CJL3 NS2
6	NS6 NS7	12	CJL2 NS1

れる部分に線を記入する方法で行った。調査の結果、協力者それぞれが様々な位置に線を記入しており、話題の切れ目についての母語話者の判断は一律ではないことがわかった。その一方、複数の協力者の判断が一致した部分も多く見られた。このような複数の協力者の判断が一致した箇所には、談話の展開を示す要因の影響が強く現れていると考えられる。そこで、本稿では、中井（2003）を参考に、調査協力者9人の過半数である5人以上の指摘が一致した箇所を「話題境界」に認定した。このような人の直感に基づいた調査では、複数の調査協力者の判断に基づいて話題をより客観的に捉えられる一方、協力者自身の中で判断に揺れが生じる恐れがある。そこで、本稿では、協力者の判断の揺れをできる限り少なくするため、調査実施の前に十分な練習時間を取った。協力者には練習用の会話資料を用いて練習してもらい、疑問を解決した後、本調査を行った。また、協力者ごとに会話資料を異なる順番で提示し、調査を行った。会話資料は「BTSJによる日本語話し言葉コーパス」^[註1]から、日本語母語話者（以下、NS）と中国語母語の上級学習者（以下、CJL）の初対面二者会話を用いる。母語場面6資料、接触場面6資料の合計12資料を用い、会話開始から14分までを分析の対象とした^[註2]。NSは母語場面の話者（6資料×話者2人分）、CJLは接触場面の学習者（6資料×話者1人分）である。話者の組み合わせを表1に示す。話者の属性により会話のスタイルが異なる影響を最小限に抑えるため、資料はいずれも20代前半の女性、学生のものを選定した。CJLは全員日本の大学に所属している。

なお、複数の関連する話題がより大きなまとまりを形成するように、話題を階層構造として捉えることができるが（村上・熊取谷1995）、本稿では話題の階層構造は考慮しない。本稿の目的は、話題の展開構造そのものを捉えることにあるのではなく、話題開始部分の冒頭に現れやすい言語形式を明らかにし、またその言語形式の特徴を明らかにすることにあるからである。

3.2 分析の焦点と発話の単位

本稿の分析の焦点は「話題開始部の冒頭に現れる言語形式」である。話題開始部（以下、開始部）とは、話題境界調査で認定された話題の切れ目である話題境界の次の1発話であり、話題開始の第1発話を指す。また、開始部の冒頭に現れる言語形式とは、発話の実質的な内容を持たないものである。(1)に分析の焦

点の例を示す。1から3にかけて、Aは昨年の自転車旅行の手順について語っている。その後6で「なんかでも すごい人に出会うのが面白い」と、昨年の旅行から、自転車旅行の醍醐味へと話の切り口を変え、その後は、今までの自転車旅行での面白かった経験を語っている。6の「なんかでもすごい人に出会うのが面白いって言う」という開始部では、冒頭の「なんか」を除いても実質的内容の理解には支障がないが、その後の「すごい人に出会うのが面白いって言う」を除いてしまうと、実質的内容の理解に支障をきたす。この「なんか」のような表現を分析の焦点とする。分析の焦点を、実質的内容を持たない言語形式に限定するのは、その言語形式をあえて実質的内容の前に用いることにより、どのような談話展開への繋がりが示されているのかを明らかにするためである。

(1) 本稿の分析の焦点

話者	発話内容
1 A	[昨年の旅行について]で適当な場所を探して公園とか大きい公園とかでテント張って(はー)テントで寝てー
2 B	そうなんだー
3 A	もうシュラフとかも全部積んでって
4 B	ふーん
5 B	いいなー
6 A	なんか でも(えうん)すごい人に出会うのが面白いって言う
7 B	人との出会いがあるの?
8 A	うーん

(横線は話題境界を表す)

分析に用いる発話の単位は長い発話単位 (Japanese Discourse Research Initiative 2017) とし、二項検定により開始部の冒頭に現れやすい言語形式を明らかにする^[注3]。長い発話単位とは、話し言葉の分析に用いるための発話の単位である節単位 (丸山・高梨・内元2006) の認定基準を対話における統語的特徴及び相互行為的な機能に着目して拡張したものである (丸山2015)。二項検定は、開始部以外を含めた会話全体の発話^[注4]の冒頭に現れる言語形式の総数と、開始部の冒頭に現れる言語形式の総数、及び会話全体の全発話数と開始部合計の比率を用いて、R (version3.6.3) により分析を行う。

なお、開始部の冒頭には、複数の言語形式が現れる場合も考えられるが、二項検定では、開始部の冒頭に複数の言語形式が現れる場合であっても、最初の

1つのみに着目して分析する。よって「**なんか**でもすごい人に出会うのが面白いって言う」の場合、まず冒頭の「**なんか**」のみを分析の対象として二項検定を行い、次に、複数の言語形式が現れる場合について分析する。

4 開始部冒頭に現れる言語形式

4.1 開始部冒頭に現れる言語形式の特徴

総発話数はNSが4,039発話、CJLが1,709発話であり、開始部の数はNSが94、CJLが31であった。また、開始部冒頭に実質的内容を持たない言語形式が現れた数は、NSが71 (75.5%)、CJLが18 (58.1%)であった。これらの言語形式は種類が多いため、以下の基準を基に感動詞、接続表現、フィラーに分類して示す (表2)。

表2 開始部冒頭に現れる言語形式

	NS	CJL
感動詞	45	8
接続表現	10	8
フィラー	16	2
合計	71	18

まず、感動詞は「発話単位ラベリングマニュアル」(Japanese Discourse Research Initiative 2017)を参考に応答系・感情表出系・呼びかけ系感動詞とし、それに準じるものとして「そう」を含めた。次に、接続表現は市川 (1978) の接続語句と日本語記述文法研究会 (編) (2009) の接続表現に含まれるもの、ないしそれに準じるものとし、「それで」に対する「そいで」等完全に同形でなくても同じものと判断したものを含めた。そして、フィラーは山根 (2002) を参考に「あー」「えっと」等の言いよどみ表現とした。以下、表2の結果に基づいて、感動詞、接続表現、フィラーの順に、開始部冒頭の出現数と開始部以外を含めた会話全体の発話冒頭の出現数、及び二項検定の結果を示す^[注5]。なお、会話全体での出現数が2回以下と少ないものは、検定の結果、有意差が見られても、考察からは除くこととする。

4.1.1 感動詞

まず初めに、感動詞の結果を示す。表3の開始部には開始部冒頭の、会話全体には、開始部以外を含むすべての発話の冒頭の感動詞の出現数を示している。NSは5種類で45例、CJLは3種類で8例の感動詞が開始部冒頭に現れていた。

言語形式ごとに二項検定を行った結果、開始部冒頭に現れやすいのはNSもCJLも「え／えっ」のみであることがわかった。これまでの研究では、「え」の他に、「あ」も話題の開始に用いられる表現とされてきた。確かに、開始部以外も含めた会話全体の発話冒頭では、「あ／あっ」の出現数が「え／えっ」を大きく上回っているが、計量的に分析することにより、「あ／あっ」は、会話の中で多く用いられているものの、開始部に現れやすいとはいえないことがわかった。

4.1.2 接続表現

NSは3種類で10例、CJLは3種類で8例の接続表現が開始部冒頭に現れていた^[注6]。言語形式ごとに二項検定を行った結果、NSとCJLでは、開始部に現れやすい接続表現が異なり、NSは「でも」が、CJLは「じゃ(あ)」が開始部冒頭に現れやすいことがわかった。

表3 開始部冒頭と会話全体の発話冒頭における感動詞の出現数

	NS		CJL	
	開始部	会話全体	開始部	会話全体
あ／あっ	5 (2.3%)	214	1 (1.8%)	56
ああ／あー	2 (1.0%)	209	0	62
あれ	0	4	1 (33.3%)	3
え／えっ	<u>33** (28.7%)</u>	<u>115</u>	<u>6** (24.0%)</u>	<u>25</u>
ええ／えー	2 (8.7%)	23	0	9
そう	3 (1.6%)	185	0	60
いや／いやー	0	20	0	13
うん	0	582	0	245
うーん	0	174	0	60
はい	0	71	0	86
ふーん	0	26	0	30
へえ／へー	0	105	0	15
その他	0	55	0	20
合計	45 (2.5%)	1,783	8 (1.2%)	684

() は会話全体の出現数のうち開始部に出現した割合 *p<.05、**p<.01 (以下、同様)

表4 開始部冒頭と会話全体の発話冒頭における接続表現の出現数

	NS		CJL	
	開始部	会話全体	開始部	会話全体
じゃ(あ)	1 (2.6%)	39	<u>6** (27.3%)</u>	<u>22</u>
そういえば	0	0	1* (100%)	1
ちなみに	1* (100%)	1	0	0
でも	<u>8** (8.0%)</u>	<u>100</u>	1 (2.0%)	50
あと	0	12	0	0
そ(れ／い／ん)で	0	29	0	4
だから	0	27	0	9
で	0	86	0	27
その他	0	37	0	37
合計	10 (3.0%)	331	8 (5.3%)	150

4.1.3 フィラー

NSは4種類で16例、CJLは2種類で2例のフィラーが開始部冒頭に現れていた。表5を見ると、NSもCJLも、開始部以外を含めた会話全体の発話冒頭に「なんか」が多く現れていることがわかる。しかし、開始部冒頭だけを見ると、NSは「なんか」が11現れているのに対し、CJLは「なんか」が全く現れていないことがわかる。言語形式ごとに二項検定を行った結果、NSは「なんか」、「え(っ)と」が開始部冒頭に現れやすいのに対し、CJLに

表5 開始部冒頭と会話全体の発話冒頭におけるフィラーの出現数

	NS		CJL	
	開始部	会話全体	開始部	会話全体
あの	0	14	1 (9.1%)	11
え(っ)と	<u>3** (16.7%)</u>	<u>18</u>	0	4
と	1* (100%)	1	0	0
なんか	<u>11** (7.3%)</u>	<u>150</u>	0	33
ん	0	1	1* (50.0%)	2
その	0	11	0	0
ま(あ)	1 (7.1%)	14	0	2
その他	0	24	0	12
合計	16 (6.9%)	233	2 (3.1%)	64

は、開始部冒頭に現れやすいフィラーは見受けられなかった。

以上から、開始部冒頭には現れやすい言語形式があり、その言語形式にはNSとCJLで違いが見られることがわかった。分析の結果、開始部冒頭に現れやすい言語形式はNSは「え／えっ」「でも」「なんか」「え(っ)と」の4形式であるのに対し、CJLは「え／えっ」「じゃ(あ)」の2形式であることが明らかになった(表6)。

表6 開始部冒頭に現れやすい言語形式

	え／えっ	でも	じゃ(あ)	なんか	え(っ)と
NS	○	○	—	○	○
CJL	○	—	○	—	—

○：現れやすい —：現れやすいとは言えない

4.2 複数の言語形式

次に、開始部冒頭に言語形式が現れた発話について、その直後に異なる言語形式が連続して用いられているものを検討する。なお「そうそう」のように、同じ形式が複数回用いられる場合は単独使用とみなした。表7に開始部冒頭に現れた言語形式が単独で使用された回数と連続して使用された回数を示す。

表7 言語形式の単独使用と連続使用

	単独	2形式	3形式	合計
NS	59 (83.1%)	11 (15.5%)	1 (1.4%)	71 (100%)
CJL	16 (88.9%)	0	2 (11.1%)	18 (100%)

括弧内は合計に占める割合を示している。NSもCJLも8割以上が単独で用いられていた。また、連続使用されたものは2形式が多く、3形式連続で用いられるものは少ない。連続使用には「えーと、え」「なんか、でも」など、様々な言語形式の組み合わせがあり、いずれの組み合わせも1例もしくは2例と少ない。このことから、開始部冒頭に現れる言語形式は単独で使用されることが多く、連続で使用される場合であっても、特に多く出現する組み合わせは見られないことがわかった。

5 開始部冒頭に現れやすい言語形式と談話の展開

NSとCJLの開始部に現れやすい言語形式が、どのような談話展開に繋がっているのかを明らかにするため、後続談話を質的に分析する。

5.1 NSの開始部冒頭に現れやすい言語形式

5.1.1 「え／えっ」

「え／えっ」はNSもCJLも開始部冒頭に現れやすい形式である。⇒は開始部、横線は話題境界、□は開始部冒頭の言語形式を表す（以下、同様）。

(2) NS：話題「バイト」－「バイトの見つけ方」

01	NS7	なんかでも出版社でバイトするのは面白かった
02	NS6	<そうですよねー>{<}
03	NS7	<うーん>{>}
⇒ 04	NS6	□ バイトどうやって見つけたんですか？<その…>{<}
05	NS7	<なんか>{>}その「大学名1」にいた時に（はい）あのー学生課ってゆうところで

(2) では、01でバイトの経験について語るNS7に対し、NS6は04で「え」

と反応を示した直後、バイトの探し方について質問して後続話題が導入されている。Hayashi (2009) は「え」は、相手の発話や行動が話し手の知識や予想、想定等と食い違っていることへの話し手の気づきを示すとしている。NS及びCJLには、(2) のように、「え」を用いて先行発話への何らかの気づきを表す様子が多く見られた。しかしその一方で、会話開始直後のあいさつの後で「えっ 東大の方なんですか？」と所属大学を尋ねる例等、「え／えっ」が何に対しての気づきを示すのか、先行文脈からだけでは明確に記述することが難しいものも見られた。談話展開の予測という観点からは、「え」は幅広い用法で用いられているといえるだろう。

5.1.2 「でも」

「でも」はNSの開始部冒頭のみに見れやすい形式である。(3) では、78まで自転車を購入した店について話されており、その後81で「地名」（最寄り駅）までの交通機関について後続話題が導入されている。78と81の間に内容的な繋がりは見られないが、先行文脈を検討すると、この断片の76行前の01でNS3が「地名」を利用していることを語っており、この共有知識をもとに81でNS2が交通機関について質問し、後続話題が導入されていることがわかる。浜田 (1995) は「でも」を含む逆接接続語により導入される話題は、会話の参加者の共有知識に何らかの形で導入済みでなければならないとしている。NSの開始部冒頭の「でも」8例全てにおいて、(3) のように先行文脈で既に導入済みの共有知識に基づいて後続話題が導入される様子がみられた。

(3) NS：話題「自転車」－「バス」

01	NS3	なんか私「地名」まで自転車で行って一すごい何度も危ない目にあつて（え）バスでひかれそうになつたりー
		[76行省略]
77	NS2	[自転車について] 私もオリンピックで買った
78		うんオリンピックは良い
79	NS3	うん
80	NS2	うーん
⇒ 81		□でも「地名」だとー4丁目の辺りっていったらバスは…?

5.1.3 「なんか」

「なんか」はNSの開始部冒頭のみ現れやすい形式である。(4)では、01でNS1が「ロマンス語の授業を受けていた」ことを語った後、04と05でNS2は「スイスの」を用いて2度質問するものの、なぜここで「スイス」という言葉が発せられたのかは語られていない。NS1のロマンス語の定義についての語りが終わった直後の21で、NS2は「なんか」を用いて「スイス」について、昔住んでいたことを語っている。内田(2001)は「なんか」について、聞き手にとっての新情報を後ろに伴うことを指摘している。NSの開始部冒頭の「なんか」11例全てにおいて、「なんか」を用いて先行文脈で話された内容から相手の知らない自身の経験や考え等を語り、後続話題を導入する様子が見られた。

(4) NS: 話題「ロマンス語」—「スイス」

- 01 NS1 そうちょっと去年 ロマンス語の授業 受けてたから
02 NS2 え ロマンス語?
03 NS1 そう あの一<言語学>{<}の方だけど
04 NS2 <スイスの>{>}?
05 えーえ だってあ の ロマンス語ってスイスの一部の地域で今話している
っていうやつ?
06 NS1 そうなの?
[14行省略 NS1がロマンス語の定義について説明]
⇒ 21 NS2 なんか 私昔スイスに住んでいたんですよ
22 NS1 あ
23 NS2 ちょっとだけ

5.1.4 「え(っ)と」

「え(っ)と」はNSの開始部冒頭のみ現れやすい形式である。(5)では、この断片の直前に会話収録のための時間管理を忘れていたことが明らかになり、01でNSSが「何をやっているんだろう」と独り言のように発話している。その後は両者ともあいづちが続き、05でNSSが「えっとー」を用いて、学部について質問することで後続話題が導入されている。(5)では、01の時間管理を忘れたことと05の学部には内容的な繋がりが見られない。しかし、他の「え(っ)と」の談話例を見ると、対話相手が所属する学部について「えーとえ何

やるんですか?そこで」と専攻について質問するなど、先行文脈と繋がりのある内容について、さらに情報を求める発話も見られた。以上から、「えっと」には、先行文脈との繋がりが必ずしも必要ではないことがわかる。定延・田窪(1995)は「ええと」を、話し手が演算領域を確保する際に発せられる、心的操作を表示する標識であると指摘している。開始部冒頭に現れる「え(っ)と」は、先行文脈との関係やこの先の談話の展開を積極的に示すというよりは、話者の心的操作を表示し、聞き手に対し、次発話が続くことを予測する手がかりを与えていると考えられる。

(5) NS: 話題「時間」—「学部」

- 01 NSS [時間管理を忘れたことについて]<何をやって>{<}いるんだろう
02 NS7 <あーそっかそっか>{>}<笑い>
03 NSS <笑い>そーう[眩くように]
04 NS7 うーん そうなんですよー [眩くように]
⇒ 05 NSS えっとー ここの(うん)学部からー
06 NS7 私は学部は「大学名1」で(あー)今年から来たんですけど

5.2 CJLの開始部冒頭に現れやすい言語形式「じゃ(あ)」

「じゃ(あ)」はCJLの開始部冒頭のみ現れやすい形式である。(6)の直前にNS3は、木曜日には授業がないことを語っている。「1日ぐらい休みにしなきゃ」というNS3の語りを受けて、CJL2は05で「じゃあ」を用いて、休みの日の過ごし方について質問して後続話題が導入されている。浜田(1991)は「じゃ(あ)」について、「新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応」であるとしている。CJLには(6)のように、先行文脈から推論された内容について「じゃあ」を用いて相手に質問をする様子が6例中3例見られた。しかし、他の例では、スペイン語を専攻する理由を問われ、アメリカ留学時のホストマザーがスペイン人だったことをきっかけにスペイン語が好きになったことを語る対話相手に対し、「じゃ何英語?」と、先行文脈の流れとは異なる内容について質問するものが見られた。このような不自然な例は6例中3例であったが、NSにはこのような不自然な例は見られなかった。このよう

な後続談話への繋がりへの不自然さには、言語形式の選択の誤りの他、談話の流れが適切に把握されていない可能性が関わっているといえるだろう。

(6) CJL : 話題「授業」－「休み」

- 01 NS3 木曜日はもう家で寝てるかバイトかどっちか<笑い>
- 02 CJL2 <笑い> ああそう
- 03 NS3 うーん やっぱり土曜日あるんだから (うん) 1日ぐらい休みにしなきゃと思って<笑い>
- 04 CJL2 そうですね

- ⇒ 05 **【じゃあ】** 休みの時どっか遊びに行く？
- 06 NS3 休みの時んー遊びに行くかなあ行くかなあ

6 まとめと今後の課題

本稿では、初対面会話における母語話者の話題開始部の冒頭に現れやすい言語形式、およびその言語形式がどのような談話展開に繋がっているのかを、学習者との比較を通して明らかにした。分析の結果、開始部冒頭には様々な言語形式が現れるものの、母語話者は「え／えっ」「でも」「なんか」「え(っ)と」の4形式が現れやすいのに対し、学習者は「え／えっ」「じゃ(あ)」の2形式が現れやすいことがわかった。また、開始部冒頭に現れやすい言語形式がどのような談話の展開に繋がっているのかを分析すると、母語話者と学習者の共通点として、「え／えっ」が話者の気づきを示しつつ、幅広い用法で用いられていることがわかった。また、母語話者の特徴として、「でも」「なんか」が、先行文脈との関連を示しながら後続話題を導入する際の標識として用いられているのに対し、「え(っ)と」はそのような先行文脈との関連を積極的には示していないことがわかった。さらに、学習者の「じゃ(あ)」と後続談話との繋がりへの不自然さからは、開始部冒頭の言語形式が談話展開の繋がりを示すには、言語形式の選択の適切さだけでなく、談話の流れの適切な理解が関わっている可能性が示唆された。

このように開始部冒頭に現れる言語形式が、どのような談話展開に繋がっているのかを分析すると、先行文脈との関連という点において、特に「でも」や

「なんか」について母語話者と学習者の違いが浮き彫りになった。母語話者の初対面会話では、「でも」や「なんか」は、開始部冒頭において無秩序に用いられているのではなく、どの位置でどの言語形式が用いられるのかには、それまでに会話参加者が積み上げた共有知識や、その後の談話展開の方向性が大きく関わっている。このような言語形式が持つコミュニケーション手段としての機能を重視するならば、「でも」や「なんか」が談話展開において果たす役割に注目する意義は大きいだろう。

本稿のデータは限られた数ではあるが、開始部冒頭に現れる言語形式や談話展開において、母語話者と学習者に違いが見られることが明らかになった。今後は「でも」や「なんか」などの言語形式に注目し、さらに詳しく分析していきたい。

〈一橋大学大学院生〉

注

- [注1] …… 本稿の目的に照らして、発話冒頭部分を中心に改めて書き起こしたものをを用いた。
- [注2] …… すべての会話は約15分間収録されているが、一番早く会話終了の合図があった会話に合わせ、会話終了の合図前までの14分間を分析対象とした。
- [注3] …… そのため、BTSJの発話データに対して、発話単位を基準として改行位置等に修正を加えた。
- [注4] …… 本稿では、発話とは、長い発話単位 (Japanese Discourse Research Initiative 2017) により区切られたものを指す。
- [注5] …… 形式別の表には開始部冒頭に出現しているもの、及び開始部冒頭に出現していても会話全体の発話冒頭での出現数が10以上のものを掲載した。また、「うんうん」のように同一の形式が連続使用される場合は1回として数えた。
- [注6] …… 長音や助詞を伴うものは、長音や助詞のないものに含めた。

参考文献

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 伊藤翼斗 (2018) 『発話冒頭における言語要素の語順と相互行為』 大阪大学出版会
- 内田らら (2001) 「会話に見られる「なんか」と文法化—「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか?」 『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』 24(2), pp.1-9. 東京工芸大学工学部

- 小暮律子 (2002) 「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』(5), pp.5-23. 凡人社
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええ」と「あの(一)」」『言語研究』108, pp.74-93. 日本言語学会
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, pp.71-95. 早稲田大学日本語研究教育センター
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法7 談話・待遇表現』くろしお出版
- 花村博司 (2015) 「日本語の会話における話題転換表現—新出型・再開型・前提提示型という話題転換の型による使い分け」『社会言語科学』18(1), pp.75-92. 社会言語科学会
- 浜田麻里 (1991) 「「デハ」の機能—推論と接続語」『阪大日本語研究』3, pp.25-44. 大阪大学
- 浜田麻里 (1995) 「トコロガとシカシー—逆接続語と談話の類型」『世界の日本語教育』5, pp.193-207. 国際交流基金
- 丸山岳彦 (2015) 「発話の単位」小磯花絵 (編) 『話し言葉コーパス—設計と構築』(第3章) pp.54-80. 朝倉書店
- 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2006) 「節単位情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』(国立国語研究所報告124) pp.255-322. 国立国語研究所
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, pp.101-111. 表現学会
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- Hayashi, M. (2009) Making a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41(10), pp.2100-2129.
- Japanese Discourse Research Initiative (2017) 「発話単位ラベリングマニュアル version 2.1」
<http://www.jdri.org/resources/manuals/uu-doc-2.1.pdf> (2019年11月30日参照)

資料

宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJによる日本語話し言葉コーパス (2011年版)」

文字化記号 本稿で主に使用した記号は以下のとおりである。

- <>{<} : 重ねられた発話 () : 短いあいづち <笑い> : 笑い
 <>{>} : 重ねた発話 [] : 文脈情報 ? : 疑問文